

2023年3月26日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「ベタニア村のろば」

聖書：マタイによる福音書21：1～11

イエスは、エルサレム近くに来ると二人の弟子を使いに出し、「向こうの村へ行きなさい」と言う。この「向こうの村」とは、ベタニアと呼ばれる村のこと。イエスはこれから、このベタニア村を拠点とし、エルサレムへの出入りを繰り返して行く。

ベタニアは、「悩みの家」「貧困の家」という意味があるが、町や村に名前を付けるとき、こういう屈辱的な名前をそこに住んでいる人たち自身が付けることはまずないはずだ。たとえば、ベトファゲという地名は「イチジクの家」、ベツレヘムは「パンの家」、ベトサイダは「漁師の家」とある。“ベタニア”と地名があるのは、明らかに外部の人たちが蔑(さげす)み、軽蔑の意図をもって名付けたものであろう。

実はこのベタニア村は、重い皮膚病の方々の隔離村であったと言われている。その他、汚れた者とされる人々、貧しい人々がこの村に住んでいたと言われる。それは、都エルサレムを追われ、エルサレムに住めなくなった者たち、エルサレムでいわれのない差別と抑圧に泣いた者たちが、この村でひっそりと生きていたということである。

イエスは、ベタニア村で調達したロバに乗ってエルサレムへ向かう。エルサレムとはどういう町であったか。神殿が置かれ、富裕層が集まり、律法が重んぜられた町。ローマ軍に支配され、軍馬にまたがる兵士が常駐し、税金が搾り取られる町。搾り取られる物さえ持たない貧しい者、献金をささげる資格さえ与えられない者はエルサレムから追い出され、中でも忌み嫌われた重い皮膚病を患った者は隔離村に、ベタニア村に押し込まれていく。それはエルサレムの清さや豊かさ、誉れ高さの対局にあるかのようにベタニアはあった。イエスは、そのベタニアを拠点とし、エルサレムへ出かけた。それは小さくされたベタニアに立ち、ベタニアからエルサレムを見ていたということである。

ロバは、ユダヤにおいて「労働者」の象徴と言われる。汗水流し、時には鞭(むち)を入れられながら黙々と労働する者をロバに例えた。いわゆる奴隷である。ロバと対比にあるのが馬だが、ロバが労働者の象徴であったのに対し、馬は軍事的支配者の象徴である。

軍事的勝利を取めた支配者は馬にまたがって凱旋入城するのが誇りとされ、勝利を表した。しかしイエスは、その馬ではなく、小さくされた労働者の象徴としてのロバにまたがり、エルサレムへ入城して行く。イエスの背中には、差別される者、悲しみ嘆く者、貧しさゆえに追いやられた者たちの嘆きや叫びを携えたものであった。そして低みにおかれた者を、高みへと引き上げてくださるのである。
(神谷)